

卷頭言

資料(雑誌)の保存をめぐって

京都南病院副院長 戸津崎 茂雄

「情報の洪水」とも表現されていますが、最近の情報量の増加は特に著しく、学術雑誌についても例外ではないようです。医学医療の分野でも「医学中央雑誌」や「Index Medicus」の頁数や収録タイトル数の増加を見れば、そしてその重量の増加を見れば情報量がいかに増大しているかが理解できましょう。このような情報量の増加は医学医療が日々進歩し、変化していることを示しています。情報を適切に取り入れて、病院における医療の質を高めていく努力が必要です。最新の情報を収集して利用できるように保存しておくこと、そして必要な情報を的確に探し出して利用に供していくこと、そのことを通して病院での医療活動に参加していく、そのために病院図書館が存在しているのだと言えましょう。

先日神戸での日本病院会全国図書館研究会で鶴見俊輔先生は、本は読まれてはじめて本であって、読まれない本はただの紙である、という趣旨のことを話されたそうですが、資料についても同じことが言えそうです。利用されてはじめて資料であり、情報となります。それ故、資料は利用しやすいように保存されていなければなりません。医学雑誌の増加に伴って、いきおい図書館のスペースの拡大を言いたくなります。しかし、病院図書館は直接には収益につながらない部門であり、また医療の質という評価しにくい分野での貢献でもあります。ますますきびくなる最近の医療情勢の下では、図書館のスペースの拡大は望めません。また、情報量が増えるに従い、図書館への文献検索や文献複写の依頼は増えてくることと思われれますが、図書館の人員の増加も情報量の増加にとってもついていけそうにありません。

必要とされる情報が迅速に利用者には到達するようにしておくためには、資料の収集と保存が十分になされていること、的確な検索がなされること、そして必要な文献が速やかに準備されることが大切です。文献検索に関しては、「Index Medicus」や「医学中央雑誌」などの二次資料による検索から、最近ではオンライン検索やCD-ROMを利用した検索が登場し、広まりつつあります。文献検索の面でのニューメディアの今後の動向には十分に注目しておく必要があります。資料の増加があり、その上に文献検索がしやすくなれば、依頼文献数は当然増えてくるものと思われれます。そこで問題になるのは、せっかく探し出した文献をいかに早く利用者の手元に届けることができるか、すなわち多数の資料が利用しやすい形で保存されているかどうかということだと思います。

多くの病院では、増加する新しい資料の収集と保存のためのスペースを確保するために、しかたなく古くなった資料を廃棄しているのが現状でしょう。そして、廃棄してしまった資料の利用要求が後で出てくるのもまた事実でしょう。昭和56年度の日本病院会全国図書館研究会のシンポジウムにおいて、当院の小河一夫前院長が病院図書館における資料の廃棄について言及しています。すべての病院が資料を永久保存することは不可能であるので、資料の廃棄についての考え方を明らかにしておくことが必要であるとして、『蔵書を処分する場合には必ずそれら古いものを利用するときにはどうしたら良いかが問題になります。そのことのめどがつかいたら廃棄処分が可能だということになるかと思えます』と述べ、他の図書館との連携の必要性を強調しています。

病院が集まって一つのネットワークを作り、そのネットワーク全体の中で古くなった資料の廃棄と保存を考え、ネットワーク内での資料の相互利用が気軽に行えるようにしておけば、一つ一つの病院が自己完結的に資料の保存をするのとは段違いに多くの資料が保存できる計算になります。資料の種類とその保存病院がわかり、さらにそれを利用することができると思われるならば、せっかく苦労して集めた資料を廃棄するという心の重荷からはいくぶん解放されるでしょう。しかし、各病院には割り当てられた資料は責任を持って、利用できるよう形で、何年も保存しなければならないという重い責任がのしかかります。この両者のバランスをとることが必要です。このような責任ある保存は図書室のみの意志決定では不可能です。病院という機関が意志決定しなければネットワークへの責任はとれないでしょう。

それぞれの病院間での資料の相互利用、それもお互いが利用しやすい形での相互利用。それができれば、ネットワーク内での資料の収集、保存の範囲は格段に広がります。協議会は文献の相互貸借についてはそれなりに経験を積んできました。今度はそれを少し進めての「分担保存」。ぜひ実現に向けて努力して欲しいものと思います。しかし、会員間には設立母体の違い、病院管理者の図書室に対する考え方の違い、そして、図書室の規模の違いなど格差の問題は歴然と存在しています。なんとか強い不公平感のないような形での分担保存、各々の病院が自らの特長を生かして、あまり負担を感じないような形での分担保存を探し出したいものです。そして、一度廃棄された資料は戻ってきませんので、遠い先のことも考えておく必要があります。病院のトップが交替しても図書室のスタッフが交替しても同じように利用できる確たるシステムとしての分担保存を実現する必要があります。各病院にはそれぞれの事情があると思いますが、その実現に向けて努力してみたいものです。

昨年日本病院会全国図書室研究会で「病院図書室における資料の保存と廃棄」というシンポジウムの座長をする機会を与えられました。今までにこういう問題について正面から考えたことが無く反省しております。「スペースがいっぱいになったので雑誌を廃棄しなければなりません」と聞いても、「スペースがいっぱいなら仕方がない」くらいにしか考えていませんでした。また、いよいよ「〇年度以前の雑誌は廃棄します」と聞いても、「仕方ないな」と言うくらいのことでした。ただ、そうは言っても廃棄された雑誌類は見ないようにしていました。それは、戦後の物のない時代に冷たい川の中で鉄屑を拾って稼いだお金で「少年」を買って「鉄腕アトム」を読んで育った自分は、きっと廃棄された雑誌をもったいないと拾ってしまうと思うからです。

資料の廃棄に同意した少しまじめな思いは「もし廃棄した雑誌の中の文献が必要になっても、大学図書館のような大きな図書館には雑誌は残されているだろうし、少々時間がかかっても我が優秀な司書はきっと文献を探し出して揃えてくれるだろう」という思いでした。きっとそういう何もわかっていない管理者に業を煮やして、「少しは勉強しろ」と座長の役がまわってきたのだろうと思います。一週間ほど真剣に悩みました。そして、これは一種のイジメであるとの結論に達し、断りに行きましたが、うまく丸め込まれ結局引き受けることになりました。それからが大変でした。病院に出てくると机の上に資料の山が積まれている日が多くなりました。資料の保存と廃棄について、病院図書室について、近畿病院図書室協議会について、〇〇〇について、…などなど「ご参考までにお読みください」とのメモが添えられて。

おかげさまでいろいろなことを勉強し、知ることができました。勉強の機会を与えてくださった主催者の方に感謝しております。今年も皆様のご活躍をお願いいたします。